

トピックス

令和3年度の但馬牛種雄牛現場後代検定成績

兵庫県が所有し、管理する但馬牛種雄牛の産肉能力を推定するための令和3年度現場後代検定成績が判明した。育種価評価の脂肪交雑基準は、7頭中6頭がBランク以上であったが、枝肉重量では、平均以下の頭数が多かった。

内容

現場後代検定法とは、種雄牛*の産肉能力を推定するために、実際に種雄牛の産子を生産し、産子の枝肉成績を基に育種価*を算出する手法である。本県では、毎年7頭の種雄牛に対して現場後代検定を次のとおりの手順で実施している。

まず、種雄牛1頭につき、繁殖雌牛40頭に人工授精を実施する。各種雄牛の産子（以下：調査牛）は16頭必要であり、6か月齢に発育調査及び体型上の特徴を確認した後、選抜する。調査牛の肥育は、県内肥育農家2戸（8頭）と畜産技術センター（8頭）の3か所で実施し、枝肉成績の判明後、育種価を算出する。

実施した検定種雄牛は、「喜平」「山長土井」「喜貴」「丸彩土井」「悠哲土井」「北菊奥」「北菊喜」の7頭であり、育種価をランク表記で示した(表)。

育種価評価の脂肪交雑基準は、7頭中6頭がBランク以上であったが、枝肉重量では、7頭中5頭でDランクを示した。

「北菊喜」は、脂肪交雑基準以外の5項目でAランク以上の成績を示した。「喜貴」と「悠哲土井」は、6項目中3項目でAランク以上の成績を示した。また、「丸彩土井」は、皮下脂肪厚がCランクであるものの他5項目がBランク以上と安定した成績を示した。

今後の方針

今回の成績と基幹種雄牛12頭の産肉能力を比較して、令和4年度の基幹種雄牛を決定する。選抜した種雄牛を活用して、引き続き但馬牛改良のスピード向上と神戸ビーフ、但馬牛のブランド力の強化を図っていく。

*種雄牛：人工授精に使用する雄牛。現場後代検定実施中の種雄牛を待機牛と呼ぶ。現場後代検定終了後、一般供用12頭の種雄牛を基幹種雄牛と呼ぶ。

*育種価：遺伝的能力を数値で示したもの。皮下脂肪厚は小さいほど、その他の形質は大きいほど能力が高い。

吉田 裕一（北部 畜産部）

（問い合わせ先 電話：079-674-1230）

表 令和3年度の種雄牛現場後代検定成績

種雄牛名		喜平	山長土井	喜貴	丸彩土井	悠哲土井	北菊奥	北菊喜
血統	父名	宮喜	芳山土井	宮喜	丸福土井	芳悠土井	宮菊城	宮菊城
	母方祖父名	谷石土井	照長土井	菊俊土井	福芳土井	鶴丸土井	丸富士井	宮喜
育種価	枝肉重量	D	D	D	B	D	D	A
	ロース芯面積	D	B	A	B	C	B	A
	バラ厚	D	C	B	A++	D	B	A+
	皮下脂肪厚	C	B	A	C	A+	A++	A
	推定歩留	C	A	A+	A	A	A	A+
	脂肪交雑基準	B	B	B	B	A++	B	C

A++:上位2% A+:上位10% A:上位25% B:平均から上位25% C:平均から下位25% D:下位25%

ひょうごの農林水産技術 No.216 (2022.2) ※本内容は、当センターホームページにも掲載

令和4年2月25日

兵庫県立農林水産技術総合センター (0790) 47-2408